大嫂 张 末

【胡川】
校異一

【校異二】

○終身
一生涯、終生。

○終身人役而已
狩野文庫本
（近田氏所藏本）は『役』を『彼』に作る。

三六

或問、犯而不校、不報無道、何以不同。師曰、有意無意耳。又曰、犯而不校非是、不與人校長短。且如大明律。不曾
有罪、懸法設科、人自犯之乃犯也。設使彼有九分九釐罪過、我有一釐不肖、均是犯法、非彼犯我也。聖門之教只是自
反自責、故曰不校、必是我全無是、彼全無是處、然後謂之犯。如此而又不校、愛敬調停之心不倦不厭、方是好學。

訓読

或ひと問ふ、犯されても非是に校いず、人に長短を校いず。且は大明律の如し。曾て罪有るざるも、懸法・設科、人自
れを犯さば乃ち犯なり。設使彼九分九釐の罪過有るも、我一釐の不是有は、均しく是犯法を犯し、彼我を犯すに非
ざるなり。聖門の教は只はこれ自ら反り自ら責む、故に校いずと曰ふ。必ず是れ我全く不是無く、彼全くはの処無く。
○必是我全無不是
《狩文庫本》
（吉田氏所藏本）は「必」を「心」に作る。

甘于盤問學。終日只依良知而行。不覺常有出入之病。曰。只是不憚切。又曰。且如干盤登此樓。初時只是一樓。既
登見其制。坐定見其精粗。又見有何物在中。少頃又見物之精粗。尚有未見未知者。至於外人
聞說此樓欲見者。但望
其樂至於左右逢源。方是良知用事。

【訓読】
甘于盤。學未問。終日只依良知依依行。不覺常有出入之病。曰。只是不憚切。又曰。且如于盤登此
樓。初時只是一樓。既
登見其制。坐定見其精粗。又見有何物在中。少頃又見物之精粗。尚有未見未知者。至於外人
聞說此樓欲見者。但望
其樂至於左右逢源。方是良知用事。

又曰。且如于盤登此樓。初時只是一樓。既
登見其制。坐定見其精粗。又見有何物在中。少頃又見物之精粗。尚有未見未知者。至於外人
聞說此樓欲見者。但望
其樂至於左右逢源。方是良知用事。

又曰。且如于盤登此樓。初時只是一樓。既
登見其制。坐定見其精粗。又見有何物在中。少頃又見物之精粗。尚有未見未知者。至於外人
聞說此樓欲見者。但望
其樂至於左右逢源。方是良知用事。
用事なり。と。
○甘于盤
○未詳
○出入
○孟子
告子上に「出入時無く、其の郷を知る莫し」とあり、「出入」とは良心の出入のこと、良心が存する
ことと失われることをいう。
○制
○盤桓
試行錯誤すること。
○左右逢原
○孟子離婁下に「之れを養ること深ければ、則ち之れを左右に取るも、其の原に逢ふ」とある。
○良知用事
○良知にまかせて事を行うこと。
○校異
○甘于盤問学
○狩野文庫本
（「吉田氏所蔵本」は「門」を「門」に作る。）
○左右逢原
○狩野文庫本
（「吉田氏所蔵本」は「左」を「在」に作る。）
問ふ。業業学業学を為すに妨げ有り。何故と。日、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。業業学を為すに妨げ有り。何故と。曰く、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯も亦学を為す可かな否や。即ち此れも是れ学なり。故に、梳頭部喫飯也亦學為可否也。即此是學。學業只是日用間一事。人生一芸而已。若自能観
三九
問、挙業必守宋儒之説。今既得聖賢本意而勘破其功利之私。何如。曰、論作聖真機。固今所見為近。然宋儒之訓乃皇朝之所表章。臣子自不敢悖。且如孔顏論為邦。行夏時操殷爵。豈即行其言乎。故師友講論者理也。応挙之事制也。德位不備。不敢作札。吾従周。無意也。

訓誦
問、挙業必守宋儒之説。今既得聖賢本意而勘破其功利之私。何如。曰、論作聖真機。固今所見為近。然宋儒之訓乃皇朝之所表章。臣子自不敢悖。且如孔顏論為邦。行夏時操殷爵。豈即行其言乎。故師友講論者理也。応挙之事制也。德位不備。不敢作札。吾従周。無意也。
敢て礼楽を作らず、吾は周に従はん。と。意必無く、惟古訓を體して自ら修むれば、可なり、と。

【校異一】

況文義又不可通

狩野文庫本（吉田氏所蔵本）は「況」を「況」に作る。
嘉靖丁亥，得之将归，至益阳，过四方学者。此地四方学者，同往求益，皆有求益也。特与指点，良知而已。良知者，知所不知，知者所不至。此知也，人皆有之，但终身未得而不知者，何也？

嘉靖丁亥，得之将归，至益阳，过四方学者。此地四方学者，同往求益，皆有求益也。特与指点，良知而已。良知者，知所不知，知者所不至。此知也，人皆有之，但终身未得而不知者，何也？

嘉靖丁亥，得之将归，至益阳，过四方学者。此地四方学者，同往求益，皆有求益也。特与指点，良知而已。良知者，知所不知，知者所不至。此知也，人皆有之，但终身未得而不知者，何也？

嘉靖丁亥，得之将归，至益阳，过四方学者。此地四方学者，同往求益，皆有求益也。特与指点，良知而已。良知者，知所不知，知者所不至。此知也，人皆有之，但终身未得而不知者，何也？

嘉靖丁亥，得之将归，至益阳，过四方学者。此地四方学者，同往求益，皆有求益也。特与指点，良知而已。良知者，知所不知，知者所不至。此知也，人皆有之，但终身未得而不知者，何也？
ことばを伸ばすのを求めるのみ。此れに学を為すのを失却するのを知らされれば、論ずと雖も何
の益あらん。又た或いは此に在りて些の説話を聴くも、去いて実切に響聴し以て自得を求むず、只観人に逢へば便ち講
ず。講ずる時に及べば又た多くは参するに己見、影響を以て、先儒の得失を軽観せんと比擬す。此の若き者は正に是
れ立志未だ真ならず、工夫未だ精ならず、自ら其の粗心、浮気の発するを覚らず、聴者の虚謙に学を問ふの意をして
反って繁殖を為さむ。所謂軽くしく自ら大として反つて之れを失ふ者なり。従時は幾箇の中乗頭なるの有り。能く
己に反り自ら療るるに到り、人の問ぶに及べば肯て多くは説かず、只我、学問の頭脳は只にはい致良知なりと
聞（得）くと説く、食息、語黙、有事、無事を論せず。此の心常に自ら炯然不昧にして、一毫の私欲をして干渉せ
默躬行して言はずして信あり、人と並び立ちて自ら化す。此れは方には是れ善く学ぶ者にして、方には是れ己の為にす

○告帰
休暇を請て故郷に帰る。

○語釈
嘉靖五年（二五七）
○得之
朱得之　稽山承儒　（二）　解題参照
○ 慎独
大学 賛意章に「故に君子は必ず其の独りを慎むなり」とある。集義

○ 孟子
公孫丑上に「是れ集義の生ずる所なり」義襲ひて之れを取るに非ざるなり」とある。

○ 致中和
『中庸』首章に「中和を致して、天地位し、万物育す」とある。

○ 深默
心に秘め多く話さないさまたある。

校異

○ 不言而信
易 織絰上に「言はずに信なるは、徳行に存す」とある。

○ 番子
又在此聴些說話
狩野文庫本（吉田氏所蔵本）は「聴」を「徳」に作る。

○ 為己
論語 聲問に「古の学ぶ者は己の為にし、今の学ぶ者は人の為にす」とある。

○ 不令一毫私欲干渉
狩野文庫本（吉田氏所蔵本）は「干」を「干」に作る。

問 質善朋友之道意
何如。
節曰、相観而善乃處友之道。相下則受益、相上則損。賛善善便忘己而逐人。便有報勝非謂朋友専以賛善為道也。故曰、忠告而善道之。不可則止。朋友数斯疏矣。然則朋友中有過而不覺不改何。曰、以
善服人未有能服人者也。以善養人，然後能服天下。

訓誦

問ふ、善を朋友に責めるの道の意、何如、と。師曰く、相ひ見て善くする者は勿れ友に処するの道なり。相ひ下れば則ち益を受け、相ひ上ければ則ち損す。織かに善を責むれば、便に己を忘れて人を遂ひ、便に我の彼に勝らんとするの意有り。孟子の此の言は、章子の子父は善を責めて善く其の善を好むの心を用ひざるが為の故に然るか。善を責む者は勿れ友に処するの道なり。然るは朋友中に在りて猶は用ふべき、父子兄弟の間の若きは絶えて用ふべからざるを謂ふ。善を以て道を為すを謂ふには非ざるなり。故に曰く、忠もて告げて善もて之を遊く。不可ならば則ち止む。善を以て人を養ひ、然る後能く天下を服す。と。

語釈

○善を責むるは恩を畳の大なる者なり。孟子を以て善くする之を磨と謂ふとある。

○相観而善。『礼記』学記に「相ひ観て善くする之を磨と謂ふ」とある。

子善を責むるは恩を畳の大なる者なり。孟子を以て善くする之を磨と謂ふとある。
則じ従ふを楽しみ、飽く者は則ち其の留むるを恥む。僧口多しと雖も、客を留めんとするの意、終に是れ剱かず息ま
ざるは、是れ利する所有ればなり。某、今の為、所実に之れに似て、過る者有るを見れば、強ひて之れを留め強ひて
之れに飯せしめんとす。我の諸友より取る者多し。既に飯肆を業とすれば、亦た目を客に強ふるを已むこと能はず
なり、と。

【校異一】

狩野文庫本
（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。

【校異二】

孔子殿、門人若有若似夫子、請以所事夫子事之。曾子雖不可、某猶有取於其事。未論有若之德何何、但事有宗盟
則

朋友得以相聚相磨。更当年同志之風不息。廉學有日新之幾。亦無各是其是之弊。
孔子劔て、門人、有若の為子に似たるを以て、為子に事ふる所を以て之れに事へんをす。曾子不可とし、従っ

「子」[箋文高旭に「昔者、孔子の没するや、三年

の外、門人、任を治めて特に帰らんとし、入て子賁に指し、相ひ喚ひて哭し、皆声を失ひ、然る後に帰る。子賁

は反り、室を場に築き、独り居ること三年、然る後に帰れり。他日、子夏・子張・子游、有若の聖人に似たるを

以て、孔子に事ふる所を以て之れに事へんと欲し、曾子に彌ふ。曾子曰く、不可なり」とある。

注疏

講学の主在者。『龍漢王先生会語』巻四自ら説むる長語を児輩に示すに、或直は推されて入室の宗盟に為

り、将に終身、性命を以て相ひ許さんとす。庶はくは以て心を慰まるに足らんことをとある。
校異一

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

諸君聞吾之言、未能領悟者、只作亂説、不必苦求通曉、苦求記憶、且只切己用功。見書単頼、知過即改、常令此心虛明不滯、後日當有不待思索、自然契合。自然記憶者、不於無思耳。

諸君、吾之言を聞くも、未だ能く領悟せず者は、只だ乱説をすのみ。必ずしも苦しくは通曉することを求め、苦しくは記憶することを求む、失せず、且も知らしむば、後日当に思索を待つして、自然に契合し、自然に記憶する者有るべし。
○領悟
体得
○乱解
しゃべり散らす。
○見善即從
知過即改
○易
益卦象伝に
「君以て善を見ては則ち遷り
過ち有れば則ち改も」とある。

【附註】
○不必苦求通曉
苦求記憶
【狩野文庫本】
（【吉田氏所蔵本】）は
「不必苦求通曉
若求記憶」に作る。
○自然記憶者
【狩野文庫本】
（【吉田氏所蔵本】）は
「億」を「億」に作る。

或問
裴公休序呪文経曰
終日呪覚而未嘗呪覚者凡夫也
欲証呪覚而未極呪覚者甚難也
具足呪覚而住持呪覚者如來
羅漢也。
終日呪覚而未嘗呪覚者如来也

何故
曰
我替他改一句
終日呪覚而未嘗呪覚者凡夫也
欲証呪覚而未極呪覚者甚難也
具足呪覚而住持呪覚者如來
羅漢也。
終日呪覚而未嘗呪覚者如来也

或ひと問ふ
裴公休
呪文経に序して曰
終日呪覚にして未だ嘗て呪覚ならざる者は凡夫なり。
呪覚を証さんと欲
生として未だ円覚を極めざる者は菩提なり。円覚を真足して円覚を住持する者は如来なり。と。何如、と。日、我他

○裴公休
裴休。河南の人。字は公美。
『旧唐書』巻一七七

参照

○序円覚経曰
終日円覚にして未と円覚者凡夫也。
具足円覚而住持円覚者是佛也。
終日円覚にして未と円覚者如来也。
彼の『大方広円覚経疏』序は

狩野文庫本
（吉田氏所蔵本）との字句の相違はない。